

(西暦) 2020 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること)

高齢者を対象とした住宅改修における作業療法士の経験に関する現象学的研究

学位の種類: 修士 (作業療法学)

東京都立大学大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 作業療法科学域

学修番号 19896707

氏名: 田中 葵

(指導教員名: ボンジェ・ペイター 教授)

【はじめに】 少子高齢化が急速に加速する日本では、現在、要介護状態になっても地域内で助け合い、必要な医療・介護サービスと協働しつつ、住み慣れた地域で安心して自分らしい生活を最後まで続けることの必要性が高まっている。安心できる暮らしのためには安心できる住まいが必要だが、住環境を改善する住宅改修は、その人らしく生き活きと生活できる環境の実現を目的とするため、この需要に応える1つの方法となる可能性がある。住宅改修には作業療法士が関わっており、彼らはクライアント本人にとって意味のある日々の行いができるよう支援し、自分らしい生活を可能にする専門職である。しかし、先行研究は住宅改修によるADL・移動の支援に関するものが多く、住宅改修による自分らしさの支援は十分に検討されていない。そこで、住宅改修における作業療法士の経験や視点を探求することで、高齢者が自分らしく暮らせる住まいの実現を促進できるのではないかと考えた。

【目的】 作業療法士が高齢者に対する住宅改修の経験をどのように捉えているのか明らかにすること。

【方法】 現象学的研究を行った。高齢者に対する住宅改修の経験が3年以上ある作業療法士8名を対象に、webアンケート・フォーカスグループインタビュー・個別インタビューの順に各1回実施した。得られたデータは現象学者のGiorgiの方法を改定したParseの方法で分析し、対象者が経験している高齢者に対する住宅改修という現象の意味を明らかにした。

【結果】 21の小テーマと7つの大テーマ(①最低限の生活の支援をやらざるを得ない葛藤、②経験を積みよりよい改修ができるようになること、③誰のためであるのか・誰にとっての納得を目指したらよいのか悩むこと、④多様な地域特性に対応すること、⑤生産的活動は住宅改修による支援の対象になりづらい、⑥提案後の将来を想像すること、⑦クライアントと家族のニーズを引き出し叶えること)が抽出された。

【考察】 本研究より、作業療法士は高齢者に対する住宅改修の経験において、様々な葛藤を抱きながらクライアントと向き合い、実現可能な最善策を模索していたことが明らかとなった。作業療法士はクライアントの最低限の生活の確保を目指し、住宅改修によりADL・移動を支援する一方、作業療法士としての特性を活かしたIADL・余暇活動・社会参加の支援を、住宅改修の側面から直接的に行うことの複雑さに葛藤を抱いていた。この要因には、作業療法士の役割が他職種から十分に認知されていないこと、住宅改修によるIADL・余暇活動・社会参加の支援の効果が検証されていないこと、日本の現在の医療制度の方針等が挙げられ、その結果として、住宅改修による効果が明らかとなっているADL・移動の支援が優先されるのではないかと考えられる。以上より、作業療法士自身が専門性を表現することで他職種との協働化を図ること、クライアントの生活に意味と目的を与える作業を選び、行えるようにするという作業療法士の役割を明確にするための研究を進めること、制度改革の検討に向けて、住宅改修によりIADL・余暇活動・社会参加を支援することと健康の関連性を具体的に示す研究を進めることの必要性が示唆された。これらを達成することで、高齢者にとってより質の高い自分らしい生活の実現を、住宅改修により助力できると考える。